

文化と文化をつなぐ

1 異文化認識のためのパフォーマンスに向けて

本書の目的は、主に日本のシェイクスピア上演と、日本およびアジアのコラボレーションに焦点をあわせて、インターカルチュラル・パフォーマンスの特色、成果、課題について考えることである。インターカルチュラル・パフォーマンスに関する議論と本書の立場については、次節2で詳しく述べることにする。さしあたり、ここでは、インターカルチュラル・パフォーマンスとは、ある文化と他の文化の相互作用から生じる創造的な実践であるとしておく。こうした実践が盛んになってきた背景には、二〇世紀後半からの現代世界の動向がある。多文化主義、ポストコロニアリズム、グローバリゼーションの台頭およびインターネットなど画面をとおした双方向コミュニケーション技術の進展により、ある文化と他の文化が出合い、相互作用をする機会が増えたのである。メディア社会と体験型志向の広がりによって、演劇が「もはや大規模で圧倒的なニューメディアにはるかに及ばない」¹⁾「オールドメディア」と見なされるようになった」という指摘がある。しかし、本書をとおして、演劇は、マイナーなジャンルかもしれないが、世界のあり方について問いかけをおこなうために、いつも新しいことに挑戦しているメディアであることを明らかにしたい。

インターカルチュラル・パフォーマンスについて考えるときに関係する主な学問領域は、カルチュラル・スタディーズ、パフォーマンス研究、演劇学、異文化コミュニケーションである。この中で、特にカルチュラル・ス



タディーズとパフォーマンス研究は、世界各地に広がる差別、偏見、格差を徹底的に批判し、社会改革へのラディカルな志向を特色とする。⁽²⁾しかし、本書の主な目的は、パフォーマンスをおして、主流文化のヘゲモニーをひたすら攻撃することではない。むしろ、この種のパフォーマンスがもっている別の力に注目し、それを探求していきたい。すなわち、(異)文化認識 (inter) cultural awareness) —— 他者や異なる文化の存在に気づくこと、またその気づきをおして (それら自体が決して自明なものではない) 自己や自文化を見つめなおすこと——の瞬間をもたらす力であり、ある文化と他の文化がつながる瞬間と、それらがつながり変容する瞬間をつくりだす力である。本書では、インターカルチュラル・パフォーマンスの創造のエネルギーだけでなく、異文化認識や文化的感受性 (cultural sensitivity) のあり方にも注目したい。

カルチュラル・スタディーズやパフォーマンス研究がその批判的実践をおして得意とするのは、問題発見であり、問題解決ではない。本書では、必要に応じて、異文化コンフリクトやカルチャー・ショックなどの管理や(一時的なものにとどまるといえ) 解決にとりくんでいる異文化コミュニケーションの知見をとりいれて、⁽³⁾パフォーマンスが潜在的にもっている文化的な力に新たに照明をあてたい。この分野は、異文化認識の開発・促進という働きをおして、問題の解決の糸口につながる認識の変革に貢献することが期待できるのである。

ここで、「文化と文化をつなぐ」という本書のタイトルについて述べておきたい。インターカルチュラル・パフォーマンスをおこなう場合、もちろん、ある文化と他の文化はいつも平穩につながれるとは限らない。実際には、ぶつつけられて、かきまぜられるという激しい過程を伴うこともあるし、またいつも成功するとは限らない。しかし、異文化認識のためのインターカルチュラル・パフォーマンスの可能性を探る立場から、本書では、ポジティブな表現をあえて選択した。ある文化と他の文化の間には、しばしば言語の違いはもとより、程度の差こそあれ、たいてい歴史的・政治的問題や権力格差が存在しており、そのことを十分自覚せずに、つなごうとする行為は批判されるかもしれない。しかし、敵対して批判しつづけても相手が聞く耳をもたないならば何の成果も生

まれない。そこで、とりあえず相手と手をつないでみる、手をつなぎながら交渉や変革の機会をうかがうという現実的な戦術もあるだろう。多種多様な文化が混在する複雑な現代世界を生きる私たちにとって危険であるのは、異文化に対する無知、無関心、シニシズムのほうである。

